
Lightning Witches ~ THE ORUSSIAN WAR ~

雑用長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L i g h t n i n g W i t c h e s } T H E O R U S S I
A N W A R }

【Nコード】

N 6 8 5 4 P

【作者名】

雑用長

【あらすじ】

欧州での戦が終わりを告げる頃、つまりは1945年の春。ネウロイは相次いで太平洋に出現、硫黄島と沖縄が陥落し、各地でネウロイによる大規模な空襲が発生しました。後に「太平洋戦争」と呼ばれるこの戦いは、同年夏、広島、長崎に追い詰められたネウロイの自爆により終結し、世界にはようやく平和が訪れた…筈でしたが

…

プロローグ

欧州での戦が終わりを告げる頃、つまりは1945年の春。

ネウロイは相次いで太平洋に出現、南方の連合各国や扶桑南方領土たるマリアナ諸島、小笠原諸島、沖縄が陥落し、各地でネウロイによる大規模な空襲が発生した。

太平洋戦線でのこの戦いは、同年8月、広島、長崎に追い詰められたネウロイの自爆により終結する…が、しかし。

千島・樺太で生き残っていた太平洋戦線の敗残ネウロイたちは、北極で態勢を建て直し、そして1946年8月、前回の戦争で弱小化したオラーシャのウル山脈よりヨーロッパ側に、再びの人類侵略の足掛りとして、進行したのである。

弱体化し、軍の再整備が整っていなかったオラーシャは、ネウロイを前にして為す術もなく陥落。ヨーロッパオラーシャは全域に渡って占領されることになってしまった。

これに対し、オストマルクのオラーシャ亡命政府は各国に支援を要請。再び、人類徹底抗戦の構えが出来上がり、欧州は再び戦火の渦に巻き込まれていくのであった。

灰色の街・

大戦が集結して少したった頃より、オラーシャやオストマルク、カールスラント等の大戦ですっかり力を失った列強諸国から独立する国が現れた。

カールスラント、オストマルクから独立したワルシャワ大公国。オラーシャ、オストマルクから独立したキエフ公国。オラーシャから独立したコミ共和国等がそれである。

カレリア共和国もそんな国の一つで、国土は、北はコラ半等から、南はペイプス湖、ラドガ湖、そしてネオガ湖を結び、さらにそこからネオガ川に沿って引かれた国境線まで。その形や大きさは、丁度スオムスを旧オラーシャとの国境で線対称にしたようなものに等しい。

独立したほかの国がそうであるように、リベリオン合衆国やその他列強諸国より支援を受けて、オラーシャの古都をそのまま取り込み、それなりに栄え、またそれなりに落ち着いた雰囲気を持つのが、この国である。

しかし今は…詳しく言えばその首都、サンクトペテルブルクは、各国の兵士でこった返し、乱雑していた。

隣国のオラーシャ帝国がネウロイに侵略され、オラーシャの首都モスクワに一番近いこの国は、必然的に人類反抗の最前線になってしまっあのだ。

人々の落ち着いた雰囲気が消え去り、騒がしさが勝るようになれば、古き良き伝統的な街並みは、ただただその勢いに負けくすんでいるように見える。

街って、そこに住む人々の生活があつてこそなのね…カレリア共和国空軍大尉、アレクサンドラ・ウラジーミロヴィナ・リトビャク…サーニャは、溜息混じりに、そう心の中で呟いた。

見上げると、相変わらずどんよりとした雲が空を覆っている。僅か

の光が差し込んだと思ったら、すぐに雲がそれを隠してしまった。
一体いつになつたら晴れるというの？

オラーシャでは、その駅から出発して行き先：つまり終点の地名を駅名にする。カレリアでもそれは受け継がれていて、モスクワ・サンクトペテルブルク鉄道のサンクトペテルブルク発モスクワ駅は、この街から北の方へ疎開する人たちと、オラーシャから逃げる人々と、そして、ヘルシンキ経由で各国から集まった将兵達とで、街中とは比べ物にならないほどの混雑ぶりである。

扶桑皇国では駅にはホームというものがあり、そこから乗降車するのが普通らしいが、この駅は地面から直接乗降車する方式で、これだけの混雑で一人の列車事故も起きないのだから不思議な「キキィ」。「きゃあああああ（ドガツ）」：「やっぱそうなるよね。」

だが、列車に轢かれた人がいても、周りの人はそしらぬ風で、いかにここが切羽つまっているかというのも解っていただけだろう。サーニヤは、後ろ髪をひかれながらその場を立ち去った。

例えば芳佳ちゃんならば治癒魔法で何とかなるかも知れないが、たとえそこに行ったとして、私が何になるというのだ。そう自分に言い聞かせ目的の場所へ急ごうとしたその時

「サーニヤ」。おいサーニヤ」。
また一つ現れた後ろ髪を引っ張る手に、サーニヤはまたため息をつく。

「……………サロマーテン准尉。外では苗字でつて言つたはずよ。」
彼はアレクセイ・サロマーテン准尉。背丈はサーニヤより少し高い位で、あどけなさは残るものの、精悍な青年である。サーニヤの従兵兼担当オペレーター。簡単ならストライカーや兵器類の整備もこ

なせるオールラウンダーだし。安心して空を飛べるのは彼のお陰だと、とても感謝している。感謝しているのだが…お調子者なのが玉に瑕なのだった。

「いいじゃないですか。サーニヤ大尉殿！」

アレクセイはおどけて言う。

「よくないわ。それにさっきだつてかつてに何処かに行つて…」

そこまで言つて振り向き、アレクセイの隣に、目に涙を一杯に溜めて今にも泣だしそうな女の子が居る事に気付いた。団栗眼に小さな口の、例えるならリスの様な可愛らしい顔つきだった。しかし、白髪交じりの荒れに荒れた長い髪に、パツと見てすぐに目につく額の大きな縫い傷。手の火傷や脚の痣が痛々しく、とても似合わない。

「その子は？」

きよとんと、何が起こつたのか解らない、という風な顔をして、サーニヤが訪ねる。

「……………リリー・ガガーリナ……………11歳……………です。」
するとアレクセイが何か言うより先に、その女の子…リリーがけなげにも答えた。

サーニヤはしゃがみこみ、胸ポケットからリベリオン合衆国製の板チョコを取り出して、一列折つて半分口に含み、残り半分をはい、といつて差し出す。

ありがとうございます。そう言つてリリーは、そのチョコレートを口に含み、まるで今まで一度もこんな美味しいものは食べたことがない、とでも言う風によく良く味わつて、飲み込んだ。

「……………可愛い」

「いやサーニヤ」

「苗字は？」

「……………リトビヤク大尉。話してきたことがある。」

アレクセイにそう言われ、サーニヤは撫でていたリリーの頭から名残惜しそうに手を離れた。

「それで……………この子は？」

「さつき列車に轢かれてた迷子だ。疎開列車に乗る筈だったんだが……途中ではぐれてしまったらしい。」

租界人と兵の雑踏の中、頼れる人とははぐれ、誰に何を頼っているのか解らない中、列車に轢かれたこの子は……おいちよつとまで

「それどういうこと？ 轢かれた？ その割には元気だけど……」

「あの娘は魔女だよ。さつきもシールド張って列車止めてた。」
あつげらんとしてアレクセイが言う。

「それは……先が楽しみね。でもひとまず迷子ってことは……どこに行くの？ 連れて行ってあげないと……」

「……それが、な。」

「………何？」

「解らないんだそうだ。」

何故か顔を背けてアレクセイが言った。

「えっ？ ……解らない？」

「朝起きたら何も言われずに駅に連れてこられて、ちよつと離れた隙におさらば。汽車に乗ったのは見たけど何処に行くのかなんて全く解らない。本当、胸糞悪いな。」

「それって……もしかして口減らしの為……？」

この国は先の戦争の傷跡のせいで、いまも貧しい人も多い。

そういう人たちが口減らしのため自分の子供を残して租界し、戦争孤児が増えているのだ。

「いや、俺も最初はそうだと思ったんだが……サーニヤ」

「リ・ト・ビヤ・ク・大・尉・！」

「………リトビヤク大尉、事はそんなに単純じゃないみたいだぞ。」

灰色の街・b

「どういうこと？」

「あの子の傷は見ただろ？手は火傷の痕、脚や腕は痣だらけ、女の子だっていうのに顔に大きな…一生残るような傷。子供同士の喧嘩じゃこうはならないぞ。」

「……………うん。」

「理由は知らないけど、あの子は大人からの暴力を受けている。」

「うん……………多分母親ね。」

サーニヤがそう言うと、アレクセイは訝しげに

「何で…そう思うんだい？」
と訊ねた。

「あの子は汽車に轢かれても問題無いくらいの強い魔法をもってるのよ、アレクセイ。傷つけられるのは同じく魔法力をもつ人位よ。」
「それは……………確かにそうだ。」

アレクセイは何か考えるような仕草を見せて、それから思い出したように、また口を開いた。

「まあ今は理由は置いといて、だ。あの娘はどうしたら良いと思う？」

そう言ったアレクセイの目を見たサーニヤは、思わず苦笑してしまった。

口では疑問の形をとりつつ、目では訴えかけているではないか。無論、サーニヤもそのつもりだった。

「保護しましょう。何かしらの暴力に晒されている事は解っているし、それに保護者ともはぐれてしまっているのよ。何も可笑しいこととは無いでしょう？」

「ああ、うん、無いな。」

我が意を得た、という風で、アレクセイはやや上機嫌に言った。

（まもなく、赤い矢号、ヘルシンキ発、当駅止まりの列車が参りま

す。)

その時丁度、駅の列車接近放送が響き、次来る列車の名前を告げた。

「あ、これだったよな、約束の列車。」

「うん、急ぎましょう。」

「あ、リリーちゃん、おいで。」

とここで、と歩いてきたリリーに背中を向けて、アレクセイはしゃがむ。

リリーは少しきよんとしていたが、やがてアレクセイにおぶさる。

「よし」

やや小走り、という風で、サーニヤとアレクセイは駆け出した。

「ひっさしぶり〜！サーアニヤツ！」

小柄で、ショートに揃えた金髪の少女が、列車から降りて出会い頭でサーニヤに抱きついた。

「元気してた？」

「うん！おかげさまで。」

サーニヤは笑顔で言う。

この少女は、言わなくてもご存知だと思う。さあ皆さんと一緒に！

『E・M・T！』よろしい。

カールスラント空軍中佐、エーリカ・ハルトマン。

対ネウロイ戦において最高撃墜数を持ち、反比例か何なのかは知らないが、私生活は壊滅的な、あらゆる意味で【小悪魔】である。

ハルトマンは、そのまま横を見て、それからたと気付いていずまいを直し、アレクセイに近付くと

「申し訳ありません、はしゃぎすぎてしまいました…エーリカ・ハルトマン、カールスラント空軍中佐です。」

と言ってアレクセイに右手を差し出した。

「え…？あ、ああはい、どうも、よろしくお願いします。アレクセイ・サロマーテン、カレリア共和国空軍准尉。サーニヤ…いえ、リトビヤク大尉の従兵兼担当オペレーターです。」

アレクセイは驚き隠せないまま、右手を差し出し、握手した。

…ええと？

「ハ、ハルトマンさん？」

サーニヤも同様、驚き隠せないままである。

「え？…ああ、これ？いやさあ、「これからはあなたが責任者なんだから、きちんとした礼儀とか、そういうものも必要だと思つた」

…ってミーナが…ね」

何があつたのかは推して知るべし。

「それにしても…名前で呼ばずとは、なかなかやるねえ、サーニヤ？」

ニヤニヤとからかう様にしてハルトマンがに言った。

「いえ…べつ…別に…そういう…」

頬を紅く染めて俯くサーニヤ。

「ふーん…で、あの娘は誰？」

サーニヤを相手にしては、少しからかいが過ぎたかな？ごめんねサーニヤ…心の中で謝って、話題を反らす。

「はい、あの娘は…」

「ふりゃあ！」

サーニヤがこれまでの経緯を説明しようとしたその時である。サーニヤの脇から突然腕が伸びたかと思うと、その手はサーニヤの胸の下側に手を添え、ふにふにと揉みしだき始めた。

「つ~~~~~~~~！！！！？」

「あ、ルツキーニ」

「へっへー。久しぶり！サーニヤん！」

二つ縛りにした黒髪にやや褐色の肌、天真万欄そのもの、という風なこの魔女は、明るく陽気なロマーニヤの、フランチェスカ・ルツ

キー二中尉。

「る……ルツキーニちゃん!？」

「うんうん、意外に大きくなってるね!」

もみもみ

「ちよつと……ルツキーニちゃん?……」

もみもみ……

「ルツキーニ……ちゃん……?」

「うんうん……なんで私だけ大きくならないんだろうな……」

もみもみ……ごちん!

「ツきゅー!……いつたあ!？」

突然鈍い音が響き、ルツキーニの胸調べは中断された。

「サーニヤに何をやってるんだ!」

「なーんだ。エイラか……」

「なーんだ、じゃないっ!サーニヤが嫌がつてるダロ!？」

雪の様に白い肌に、鎖骨の辺りまで伸ばした雪色の髪の毛の少女が、拳骨をぶんぶん振り回している。

彼女は、サーニヤにもやもやとした好意を抱くスオムス空軍のトツ

プエース、エイラ・イルマタル・ユーティライネン少尉。

「なっ、サーニヤッ。」

良いカツコ見せることが出来たことを期待して、エイラはどや顔でサーニヤを見る。

だが……

「ルツキーニちゃんはどつなの?」

「?……何が?」

「胸、ルツキーニちゃんはどつなの?」

「え……サーニヤ?何を……ふにゃああああ!？」

聞こえたのはいたずら好きの仔猫の断末魔だけだった。

灰色の街・c

「サーニヤ、ルツキーニの胸実験はいいからさ、あの子は何なのか説明してくれる？」

みるとハルトマンはリリーの方を見ていた。はたと気付いて、サーニヤはルツキーニの胸から手を離す。

それにしても…これ以上無いくらいぺったんこね。

「へん！私だつてB位にはなつたもん！」

「それ扶桑サイズじゃん？」

「ち〜が〜う〜！」

「まあいいや。で何なんだ？その子」

「華麗に無視された！？ふえーんもういいもんリリーちゃんと遊んでる！」

ルツキーニはそう言うと、リリーのいる方に駆け出した。

「…あの子は…列車にぶつかって、迷子だったので私たちが保護したんです。名前はリリー・ガガーリナ。魔法使いです。」

「ふーん………軍に届け出は？」

「…まだです。」

「えー…なんで？」

「虐待を受けているみたいなんです。このまま保護者の方に引き渡すのはちよつと…」

「ふうん…それはいいけどさ」

ハルトマンの顔から急に何時ものお気楽さが消えた。

「届け出ないのは良いけど、その後どうするの？」

「えっ…？」

虚を突かれたようにサーニヤは言った。

「前のブリタニアは余裕があつたから良かったかもしれないけど、今回は総力戦で急ぎだから食料、資材その他もろもろに余分もない。今回の基地は狭いからあの娘が個人的に住むような場所も無いよ？」

「そうでなくても一般人に基地内をうろつかせるわけにはいかないし。」

「……………はい。」

「まったく…あのね、サーニャ。」

「……………はい。」

「保護はいいけど、その子にどういう事があったのかの確認を忘れないこと。あと、連合軍の戦災孤児保護の組織はそういう虐待児の対処もやってるよ？何も調べずに親に保護者に引き渡すという事は無いよ。」

「……………そうなんですか？」

「うん。だから自分達だけで心配するんじゃないで軍の厚生福利施設に相談するとかしなよ？」

「……………はい。」

「まあでも……………魔女なのか……………保護する方法が無いわけではないね。」

ニヤリ、と、ハルトマンは楽しそうに笑みを浮かべた。

「ねえねえ。」

「ん…？あ、何でしょう。中尉。」

アレクセイがリリーの相手をしていると、ルッキーニが話しかけてきた。

「あなた、何者？」

「え？…ああ、カレリア共和国空軍准尉、アレクセイ・サロマーテ。サー…いえ、リトビャク大尉の従兵です。よろしくお願いします。」

「うん！よろしくね。…へえー、サーニャ従兵居るんだー…」

「ええ、リトビヤク大尉は、カレリア共和国空軍の第一航空隊の隊長として招かれた方なので。」

「え！隊長だったの!？」

「はい、知りませんでしたか？先日の戦争勃発の時の国境防衛では、亡命オラーシャ軍と共に国境線を守って、援軍が来るまでの時間を……」

「ちょ、ちょっと待てー!」

アレクセイの話を割って、エイラが叫びながら近付いてきた。

「サーニヤの従兵!？」

「ええ……そうですけど……」

「……おまえ、サーニヤに変なことしてないだろうな!」

「は……?変なこと……」

一瞬考えて、ああ、成る程ねえ……と思った。その手の事を妄想した事は何度も有るし、願望が無いわけでもない。しかしまあ残念ながら(?)一度もそう言う事は無いし、それが原因で懲罰大隊行きなごめんである。欲情に任せて一生を棒に降るとかマジ勘弁。

……アレクセイはいろいろ考えた末に、おもしろそうなので「さあ、どうでしょうねえ?」とはぐらかす事にした。

「は……はつきりしろよー!」

アレクセイのネクタイを掴むと、エイラは前後に揺すつる。

「ルッキーニ!おまえも何とか……」

エイラはそう言って振り替える。しかし……

「お名前は?」

「リリー・ガガーリナ、11歳です!」

「ふーん……じゃありりー、ちょっとお姉ちゃんと遊んじゃう?向こうめんどくさそうだし」

「え………はい!」

リリーとじゃれていた。

「ルツツツキイイイイイニイイイイイ!!!!!!??????」

「こら、エイラ!」

ポカリ、と、サーニヤがエイラを小突いた。

「サ、サーニヤあ!？」

「私はそんな変なことはしてません!……もう……あと、意地悪しちゃだめよ?アレクセイ。」

「ああ、ごめんごめん、おもしろくってつい。」

「もう…エイラ、ごめんね?」

「え…ああ、いいんだ、別に…」

すねてそっぽを向くエイラ。

「?…どうしたの?エイラ。」

「いつ…いやっ…何でもない…うん、何でも無いんだ!」

「…そう?…」

「うん、ホントだホント。」

「そう。じゃあいいわ。…そうそう、それで…リリーちゃん?」

「はい!なんですか?」

リリーは元気な返事を返した。

サーニヤはしゃがんで、目線の高さを同じにしてから、切り出す。

「リリーちゃんに聞かなきゃいけないことがあるのよ。」

「なん…でしょう。」

さっきの声とは比べ様も無い位弱々しく、リリーが返事した。

この怯え様は一体何?疑問は残るものの、サーニヤは言った。ここに立ち止まっても始まらない。

「簡単に聞くわ…お家に…ご家族のところに戻りたい?それともここに居る皆といたい?」

「…何で…そんなこと訊くんですか?」

「あのね…」

サーニヤが説明する前に、リリーは突然何かに恐怖する様に青ざめた。目には絶望の色が浮かぶ。

「いやですっ!」

「リリー…ちゃん…?」

「あんなとこ…もう帰りたくないですっ!お願いします!皆さんと

いさせて下さいっ！何でもしますっ！」

リリーが深々と頭を下げた。小笠原流に突入しそうな勢いである。それを確認して、サーニヤは後ろを見た。どうなの？ハルトマンさん………？

「……………よし、合格だね。」

「えっ？」

リリーが顔を上げる。

「リリー、おまえは今日から私たちの仲間になるんだよ。」

「おいハルトマン、それって…」

「エイラは黙ってて」

「サーニヤあ!？」

二人の問答に苦笑し、そしてこのメンバーが戻ってきたんだなあ…と、再確認したハルトマンは、新しいメンバーを迎え入れるため、思い出と共にその名を口にした。

「ようこそ。ストライクウィッチーズへ。」

灰色の街・d

(ハルトマンさん)

突然インカムから声が流れ、ハルトマンはインカムに手をあてて通話モードにした。

「なあに？クリス。」

通話の相手はクリスティアーネ・バルクホルン。あのゲルトルト・バルクホルンの妹だ。

全快したあと姉と同じ道に進む事を希望。ハルトマンが面倒をみているが、やはり姉譲りで素晴らしい才能の持ち主である。

(こちらは全員探しましたよ。まとまってくれてたので助かりました。合流した方が良いですか？)

「ううん、そのまま新しい基地に行っちゃって？あとから合流するから。」

(解りました。ではまたあとで)

「うん、後でね。…さてと。………サーニヤ、私ちよつとやることあるから皆を連れて先に基地の方に行っちゃって。」

「用事？………はい、解りました。」

後で聞きますからね、とサーニヤはハルトマンを睨んだ。

そのにらみに、ミーナと同じ物を見たハルトマンは、思わず苦笑してしまった。こうなったら逆らえない。押しの強さは昔からあったが…親役が板について居るといっつか。

サーニヤも伊達に隊長をやった訳ではないらしい。

「運転は…アレクセイ、できるよね？」

「出来なかつたら従兵はつとまりませんよ」

「うん、じゃあまた…」

「はいはいはい！、私もちよつとやることあるー！」

エイラが勢い良く手をあげた。

「…エイラ？」

「ん…いいよ。じゃあサーニヤ、宜しくね。」

「…はい、じゃあまたあとでね、ハルトマンさん、エイラ。」

「それで…ハルトマン、何でなんだ？」

「何で…って？」

「とぼけんなよなー…何であんな小さな子を私たちの仲間にしたんだよ。」

「可笑しい？」

「いくら魔女つつたって何の訓練も受けてない子なんだぞ？可笑しすぎる。」

「…そうだね…ついてくれば解るよ。」

「ついてくればってなあ…それとあいつ、あのいけすかない奴！」

「サーにゃんの従兵っていつてたじゃん。」

「そんなの解ってる！問題はあいつがだなあ…ハルトマン？いきなり立ち止まった」

「みてよこれ。」

「これは…？？」

そこには、汽車が…正確には汽車だったものが置いてあった。

前面はぐしゃぐしゃになり、あつちこつちからパイプがはみ出して、水蒸気が漏れている。

「さつき汽車に乗ってるときちらっと見たんだよ。これがぐしゃぐしゃになってるの…」

「…で、これがどうしたんだ？」

「…サーニヤは言ってただろ、「列車にぶつかった」って。」

「…まさか。いくら魔女っていつたって、普通『跳ねられて無傷』だろ？」

「…まあ普通はね？」

「おい！その嬢ちゃん！」

突然後ろから大声を浴びせられて、エイラとハルトマンは後ろを向いた。

見るとそこには、炭だらけの繋ぎを着て、ひげ面の大男が立っている。

「何やってる！見せモンじゃねえぞ！」

「あ、はい。すいません。あの…これは何が？」

「ああ！？何か知らねーけどちっちえー娘ツ子にぶつけたらこうなつたのよ！チエツ、ついてねーぜ、全く…お前ら、魔女か？」

「はい、そうですが。」

「あの娘ツ子は魔女だと思うんだけどよオ、まさかおめえらの部隊じゃねえだろなア！」

「違いますか…」

やべっ、と思いつつ、ハルトマンは笑顔でごまかした。この笑顔はミーナ直伝である。大抵のことでは崩れるはずもなかった。

「そうか…解った。もし会ったらよオ、伝えとけ、その娘ツ子に。」

『いたかつたろう、ぶつけっちまって悪かった』ってよ、

ハルトマンは少し驚いてから。ついでだ、もうちよつと証拠をつかんでやるう。と、

「因みにどんな子でした？」

と聞いた。

「ん？ああ、おでこんところに。でっけえ古傷があつてよオ…真っ白な肌だけでも、腕も足も生傷だらけで痛々しかったなア…まあそんなとこだ、よろしく頼むぜ。」

「汽車がぐしゃぐしゃになるって、一体何なんだ？」

「さあ…解らないけど…」

「解らないけど？」

「早く基地に行こう。みんな待ってるし。伝えなきゃいけない事もあるしね。」

「ぱちん、とウイंकをして、ハルトマンは駆け出した。

「あ、まてこら！はぐらかすなよなあー！」

褐色の基地・

「ここが…新しい基地か？」

中央に金色の建物があり、分銅型の城壁に囲まれた平城要塞、丁度弧の弦に成るように飛行場がひかれてあり、その間を、極めて事務的な建物が並んでいる。ここが、彼女達の新しい基地である。

「うん…といつてもまあ、この中に建物が幾つもある、その一つを使うんだけどね。」

「ふーん、ま、前回の様にはいかないか。」

「あれは優遇されすぎだよ…経費削減っていうのも領けるくらいね。マロニーは…あれは暴走しすぎだけど。」

ハルトマンは感慨深げにそんなことを言った。その顔をまじまじと見つめる

「……………何？」

「…ハルトマン、お前なんかかわったなー」

「そうかな？」

「おまえそんなに考える奴だったっけか？」

「…一応、戦闘隊長だからね。」

「うーん…」

「あっ！ハルトマンさん！エイラさん！」

「お久しぶりですわね。お二人とも。」

「お、ツンツン眼鏡。」

「その呼び方は止めてくださいまし！」

早速エイラと口論を始めた彼女は、“青の一番”ことペリーヌ・クロステルマン中尉。

上品な感じに纏まった印象の、ガリア貴族の末裔である。

「いつこつちに？」

「さっき飛行機で着きました。基地の方も見ましたよ。皆から、そろそろエイラさんとハルトマンさんが着く頃だって言われて、走っ

てきたんです。」

優しそうな印象を受けるこの魔女は、ブリタニア空軍のリネット・ビショップ准尉。

二人はともにガリアの復興の為にパリに居たが、それも一段落ついたのと、統合戦闘団の設置とで、こうして駆けつけたのである。

「そうか…まあ話は色々あるだろうけどさ、立ち話も何だし、そろそろ行くか?」

「そうしましょう!お茶も出しますよ。」

「お、久しぶりにあれが飲めるのか、楽しみだな」

「はい、丹精こめて煎れます。」

「よし、そうと決まれば…ほらその二人!いくよ!」

「あーい、おら、はらへよへりーぬ」

「ひょっほまっれくらはいまひ!」

エイラとペリーヌは、お互いの頬をひっぱって、頬が真っ赤になっていた。

「ハルトマンさん、おかえりなさい」

基地は、要塞の一角にあった。作りは鉄筋コンクリートだが、外壁は褐色の赤煉瓦で被われている。

玄関では、クリスが出迎えてくれた。

「うん、ただいま。クリス、皆はどこにいるの?」

「ついてきて下さい。他にもいろいろ案内しますから。…クロステルマンさんとビショップさんはどうします?」

「ペリーヌでいいですわよ。…そうね、さっきはすぐに出てきてしまいましたし、ご一緒しますわ。」

「私も、リーネって呼んでね。…うん、キッチンも見てみたいしね。」

よろしくね、クリスちゃん
「はい！」

3階にあがると、明るく軽やかなピアノの音が響いていた。

「あ、ピアノの音だ…サーニャ？」

サーニャこんな曲弾くんだっけ…とエイラがいぶかしむ。

「へー、サーニャこついうのも弾くんだ。」

ハルトマンが言った。

「この曲は…ガーシュウインの“ラブソティ・イン・ブルー”ですわね。」

「ガーシュウイン？」

「今話題のリベリオンの作曲家ですわ。聞いてて楽しいのでよく聞いてますわよ。」

「そういえばガリアのペリー又さんの部屋、いつも明るい曲がかかっていますもんね。」

「一刻も早いガリアの復興の為に気持ちから盛り上げておかないと…まあ、滅入る曲をかけても仕様の無いことですわ。…まあそれはいいとして…これは連弾？…ですわね。それに片方は今までできたことが無い音ね。」

「兎に角、入って見ましようよ。」

そういつてクリスが扉を開ける。

そこには座って楽しそうに曲を聞いているルッキーニとリリー。ソファーに座ってくつろいでいるアレクセイと、ピアノの横でこれまた楽しそうにピアノを聞いている女性。…シヨートでまとまったブルンドの髪に鋭い目つきの知的でクールな女性だ。

アップライトピアノで旋律を弾いているのはサーニャ、そして、配

線で増幅器に繋がった鍵盤で伴奏しているのが、これまた知らない顔で、活発な感じの…どこかハルトマンに似た女の子だ。髪は同じ色だが、この子は長く、肩甲骨のあたりまでであった。

「あ、ハルトマン。」

「あ、たいちよーさん！」

ルッキーニとリリーがこちらに気づき、やってくる。

アレクセイも気付いて、ピアノの横の女性とオラーシャ語で何か話した後、その女性を連れてこちらに来た。

「ピアノがあつたからサーニヤとエリザ…ああ、いま電子ピアノ弾いてる人ね。で、エリザとサーニヤ連弾で弾き始めたんだけど…びっくりしたよ。なんかものすごく暗くて重い曲をだつたんだもん。」

ルッキーニが言う。

「それで丁度その本棚に楽譜があつたから、即興で初見させてみたのさ。上手いね。あの子。」

ピアノの横に立っていた女性が言った。

「当然だろ！サーニヤは凄いんだ。音楽の学校にも行ったし、お義父さんは有名な作曲家なんだからな！」

「おーい、エイラ、変換間違えてるぞ。」

とハルトマン。

「う、うるさいな…。…何で解つたんだ？」

「そうか、君がユーティライネン少尉か。」

「今は中尉だ。…お前一体誰だ？」

「ん、私か？私はエフゲーニヤ・カトウコフ。オラーシャ亡命軍准将。この戦闘団の団長だよ。」

「だん…ちよ…？」

「うん、団長。」

「ハルトマンは？」

「私は戦闘隊長。昔の坂本少佐だね。」
とハルトマン。

「ミーナ大佐は？」

「ミーナは司令。今は…どこ行った？」

「ミーナならさっき連合軍の司令本部に行ったぞ。こんなことが多
いだろうから今回はミーナに会うことは少ないだろうな。」

「…で、団長。」

「うん。」

「…ごめん…なさい。」

「あははは！いいさいいさ。階級はあんまり重視しないんだろう？
私も皆のことは名前で呼ぶよ。…お、演奏も終わったか。」

演奏が終わったのか、さつきまで伴奏を弾いてた魔女が、電子ピア
ノをしまい、みんなの居る方向に近づいて来た。

「エリザ、ピアノうまいねー！」

「エリザさん、凄かったです！」

ルッキーニとリリーが駆け寄る。

「うん、ありがとう。…サーニヤ、連弾ありがとうね。」

「うん、楽しかったわ。また一緒にやろうね！」

「もちろん！」

それから、バルクマンはエイラとハルトマンの方に向き直った。

「私はエリザベト・バルクマン。カールスラント陸軍の曹長です、
よろしく。」

「エーリカ・ハルトマン。空軍の中佐だよ。」

「エイラ・イルマタル・ユーティライネン。スオムス空軍中尉だ。」

「いやあ、すごい人ばかりだなあ。皆さんに遅れを取らないよう
に私も頑張るとするよ。」

「トツプタンクエースが何いつてるんだよエリザ。でもまあ、うん、
でもその勢いで、ネウロイなんてちゃっちゃと追い出しちゃおう。」

「うん、そのいきそのいき。じゃあ私たちは先に会議室の方に行っ
てるよ。」

とカトウコフが言う。

「じゃあまたあとでねー。カトウコフ、バルクマン、ルッキーニ、リ

リー、サーニヤが出て行く。

「あ、それと一階にも人がいるから、呼んどいて。」

「了解：さて、じゃあ一階に行ってみようか。」

ハルトマン、エイラ、ペリーヌ、リーネ、そしてクリスは会議室に向かう組が出て行くのを見届けて、一階に向かった。

褐色の基地・（後書き）

基地の紹介。

モデルは、ロシアはサンクトペテルブルクにあるペテロパブロフスク要塞。様々な国の魔女が集まっている集合ウィッチ隊専用基地です。

オリジナルウィッチのイメージモデル紹介

リリー・ガガーリン

ユーリ・A・ガガーリン（ソ連）

エフゲーニャ・カトウコフ

ミハイル・カトウコフ（ソ連）

エリザベト・バルクマン

エルンスト・バルクマン（ナチスドイツ）

以上！気になったらググって下さい。

褐色の基地・b(前書き)

最後の方やっつけですいませんm() () m
ただの説明ですしそんなに長くしてもしょうがないんですよ…。
萌重視じゃありませんし。
早く太平洋編書きたい…

褐色の基地・b

「一階は…お風呂ですわね…」

「今は…誰も入ってないみたいですわね。」

「この扉は何だ？…おお、サウナがある！」

エイラがサウナの扉を開ける。本格的なロウリュだ。

「あ…ヘイへさん、誰か来たみたいですよ。」

「ん？あ、エイラじゃん！？」

中にいたのは、女性にしてはやや大柄で、ひきしまった体つきに中性的な顔立ちをした人と、身長はルツキー二と同じ位だろうかと、とても小柄な人だ。二人共透き通るようにとても白い肌をしていて、どちらも北欧出身であろうことが伺えた。

「ジーナ？お前ジーナか？」

「うわーひっさしぶりだな〜いつだっけ？最後にあっただの。」

小柄なウィッチが言った。

「おいおい、サウナから出てきて汗まみれの体でくっつくなよ。」

「あ、あはは、ごめんごめん。」

「エイラさん、その人は？」

とペリーヌが言う。

「ん？ああ。こいつはジーナ・ヘイへ。」

「ジーナです よろしくお願いします。」

キラッ …ておいそれ番組ちがうぞ。

「ヘイへさんって…あの？」

リーネが言う

「何に対して【あの】なんだかよく解りませんが…そう、私が【狙撃手】、スオムス陸軍のジーナ・ヘイへ。階級は少尉。よろしく。」

「リネット・ビショップ、ブリタニア空軍准尉…同じく狙撃です…」

「ああ貴女がリネットさんですか。空という3次元空間の不安定さの中での狙撃、なかなかのものです。」

「は…はい、ありがとうございます…あの…よろしければ後で狙撃の訓練を…」

「もちろん構いません。喜んで。」

「あれ？キャラかわってない？」

ハルトマンが言った。

「そうなんだよ…こいつキャラがコロツコロ変わるから掴みどころがないんだよね…」

「まあいいや…後ろの人は？」

「私…ですか…リウドミール・パヴリチェンコ。オラーシャ陸軍少尉。…ヘイヘさんとタツグを組ませてもらっています。」

大柄なウィッチが言う。

「リウドミール！もつとはつきりしゃべんなさい。ぼそぼそ喋っても聞こえないわよ。」

ヘイヘが言った。

「はい…すみません。」

「…まあいいや。そうそう、みんなミーティングルームに集まっているってよ。」

「あら、ご報告ありがとうございますわ。」

「それとそのキャラを使うのはやめてくんないかな。約一名と混同されちゃうから。」

「分かりました。じゃあ行きましょう。それではまた。」

リーリアとヘイヘはそういうと、浴場から出て行った。

「本当、つかめないな。」

「うん。」

「…クリス、キッチンと食堂はこの隣？」

「はい。行ってみますか？」

『勿論！』

「おっきなキッチンですね。」
「今回は烹炊班がいますから、整備班、戦闘班などなど、団内全てのご飯はその人たちが作ってくれますよ。」
「お、小さなエレベーターがあるぞ。なるほど、三階の談話室まで運べるのか……」
「こっちは……ああ食堂……って、でかつ！何これ。」
「だから言ったでしょう……団内全員が一度に食事出来るんですよ。」
「ふーん……」

「ここまでが【生活施設】です。ほかに医務室とかがあります。ここから先は個人の部屋で……つまり【居住区】ですね。……その先は【戦闘区域】です。」
「……ハンガーとか司令室がある所ね。」
「ミーティングルームとかもそっちの方です。では行きましょうか。皆さんそちらにいるはずです。」
「うん、行こうか、みんな待ってる。」

褐色の基地・b（後書き）

オリジナルウィッチのイメージモデル紹介

ジーナ・ハイハ

シモ・ハイハ（フィンランド）

リュドミール・パヴリチェンコ

リュドミラ・パヴリチェンコ（ソ連）

以上！気になったらググって下さい。

褐色の基地・c

会議室には戦闘員と各班の責任者が集まっていた。

遅れて来た数人が席に着くのを確認して、カトウコフは話始めた。

「知つての通り、我が故郷、オラーシャのヨーロッパ地方がネウロイに占領されている。かろうじて国境線は守れたものの、ネウロイが攻勢に出て版図を広げるのは時間の問題だろう。」

そこで、アフリカの第31統合戦闘飛行隊とブリタニア、リベリオン、カールスラント、扶桑の機械化陸戦歩兵連合の空陸共同部隊の成功例に習い、常設の混成団を設置することになった。

我々の任務は国境線の防衛、そしてこちらから攻勢に打って出る際の先陣となり、他部隊の突破口を切り開く事だ。

重要になるのは速さ、機動性、そして航空部隊と陸戦部隊の連動性だ。

ここに、第601統合戦闘混成団、通称【ライトニングウィッチーズ】の設立を宣言する。

各員、十分に力を発揮出来る様、励んで頂きたい。」

『了解!』

「さてそれじゃあ後の事は…エーリカ、任せていいかな?」

「いいよ」

ハルトマンはそう言うと、壇上へ上がる。

「えっと交代はいいんだけどさ…何を喋ればいいの?」

「人員の紹介とか。なんなら自己紹介形式でもかまわないし。」

「じゃああなたがやればいいじゃん…」

「私はめんどくさいのは嫌いなんだ。」

そういつてカトウコフは席についた。

「なんだよそれ…じゃあとりあえず。そのグータラなのがこの団長のエフゲーニャ・カトウコフ。階級は准将。」

「君にグータラとは言われたくないなあ…」

「はい質問」

「なに？エイラ」

「その団長、つてのは一体なんなんだ？だってミーナが司令だろ？」
「うーん…まあ、わかりやすく言うともロニーの立ち位置だな。」
カトウコフが言ったその言葉に、古顔のメンバーが全員揃って反応した。

「あ、いや悪役って意味じゃないぞ。つまりは代表だ。作戦やらは上から伝達されるし、その為の運用はミーナ司令がやる。これでいいかな？エイラ。」

「ああ、わかった。」

「それで…私は副司令兼戦闘隊長、エーリカ・ハルトマン。カールスラント空軍中佐。あと順番にお願い。」

「クリステイアーネ・バルクホルン。同じくカールスラント空軍の曹長です。」

「リネット・ビショップ。ブリタニア空軍准尉。よろしくお願います！」

「ペリーヌ・クロステルマン。自由ガリア空軍中尉ですわ。」

「エイラ・イルマタル・ユーティライネン。スオムス空軍中尉。」

「フランチェスカ・ルツキーニ。ロマーニヤ空軍中尉。」

「リリー・ガガーリナ。カレリア空軍軍曹ですつ。頑張ります！」

「アレクサンドラ・ウラジーミロヴィナ・リトビャク。カレリア空軍大尉。」

「アレクセイ・サロマーテン。カレリア空軍准尉。通信士兼オペレーターだ。よろしく。」

「おいちよつと待てー！」

「…なんです？ユーティライネン中尉。」

「なんでお前がそこにいるんだ！」

「今オペレーターだって…」

「違う！そうじゃなくて…」

「サーニヤの隣に居たいってことだろ？」

「そうそう…って何を言わせんだハルトマン！」

「えーと…ジーナ・ヘイへ。スオムス陸軍少尉DEATH！ヒヤッ
ハ―！」

「怖えよ！っていうか勝手に話進めんなー！」

「リウドミール・パヴリチエンコ。…オラーシヤ陸軍少尉。」

「おお、お前変なところでノリいいな…じゃなくてさー！」

「これは続けるべきかな…エリザベト・バルクマン。カールスラン
ト陸軍曹長です。」

「もういい…なんでもない」

「戦闘隊はこれで終わりかな？」

「ああ、あとは太平洋側が残ってるだけだ。」

「そう…じゃあその他のメンバー。まあアレクセイは流れて言っ
ちやったからその他の人よろしく。」

「じゃあまず始めに私からかな？私は自由ガリア空軍のアントワネ
ット・ド・サン＝テグジュペリ。少佐だ。戦術偵察や空中管制が任
務だよ。よろしく。」

その魔女はとてもスタイルが良かった。身長はとても高く、胸はシ
ヤ―リーと比べても遜色ないのではないだろうか。

その後、烹炊長や整備長の挨拶が続き、最後に衛生隊の番になった。
「えーと…衛生班は軍医長がまだ不在なので、私の方から話をさせ
て頂きます。」

丸刈メガネにひよろひよろとしたいかにもやっつとこ研修が終わった
所だ、という感じの青年だった。

「あ、私は森臨次郎。扶桑皇国陸ぐ…あ、違った。陸上自衛隊の医
官三尉です。やっつとこカールスラントの病院で実習を終えたところ

で収集がかりなりました、少しでも役に立てればと志願いたしまして、ここに配属となりました。体に不調のある方は遠慮なく医務室に来て下さい。」

焦って噛みながらも森は言い切った。

「ところで軍医長って誰？」

ハルトマンが言う。

「なんだ、知らないのかい？君達もよく知っている子だよ。今は、そうだね…」

カトウコフは世界地図の前に立ち、ユーラシア大陸の東岸を地図でなぞり、丁度扶桑の北緯で止めて言った。

「丁度高麗にいる頃かなあ…」

褐色の基地・c (後書き)

オリジナルウィッチそのほかのイメージモデル紹介

アントワネット・ド・サンⅡテグジュペリ

アントワヌ・ド・サンⅡテグジュペリ

森臨次郎

ある人物の孫設定

次回からは太平洋編をお送りします。

浅葱色の特急・a

第601統合戦闘混成団設立より5日前：1946年8月10日。

宮菱製八四三魔道エンジンが唸りをあげる。

暫くそれに聞き入り、扶桑皇国航空自衛隊二尉、宮藤芳佳は、手の中のM2カービンのオペレーティングスライドを引き、薬室に初弾を装填して、腰にある刀の感覚を確かめる。

そして前を向いた。

今日の獲物は中型のネウロイー匹。

準備万端……。芳佳がゴーグルを嵌めると、多少のノイズの後、インカムに人の声が入って来た。

（用意はいいかい？芳佳！）

「いいよ！ナオちゃん！」

声の主は菅野直枝。第502統合戦闘航空団で戦っていた。芳佳と
同じ歳の魔女だ。

（よし、行くぞ！）

「了解！」

同時に菅野は旋回し、芳佳はそのまま加速した。

ジャッ！

耳のすぐ横をビームが通過する。

ジャッ！

二発目はお腹の下を通り抜けて行った。

ジャッ！

真っ正面から来たものを、微妙な旋回で避ける。

スピードは緩めない。

何十発のビームの中をくぐり抜けて、ひたすら加速。

ドーバー海峡で戦ったネウロイや、東京湾や東京の上空で戦ったネウロイに比べれば、こんなネウロイのビームなど芳佳にとっては涼風だ。

目一杯近付いて一連射した後、さらに加速をかけつつ急旋回。もう一連射して離脱。

追って来たネウロイに向かって当てずっぽうの牽制射撃を何発か放ったあと。フラップをだして急旋回する。

牽制射撃にスピードを緩めたネウロイの後ろをとると、芳佳はありつただけの弾薬を撃ち込んだ。

M2カービンはリベリオンからの支援物資で、反動が少なく当てやすいのは良いのだが、いかんせん少し威力不足なのだ。

芳佳は弾切れの銃をさつと後ろに担ぐと、かえす動作で刀を抜く。

抜けば珠散る氷の刃。二尺三寸九字兼定一振。刃に纏わせた魔力で妖しく紫色に光るそれで、芳佳はネウロイの背の部分を叩き切った。

ゴバツ！という音とともにネウロイの装甲が割れ、コアが露わになる。

「ナオちゃん！」

(わーってるって！)

芳佳が叫ぶが早いか、菅野はネウロイの真上から急降下し、超硬シールドでコアをぶち抜く。

ネウロイが悲鳴を上げた。コアを砕かれたネウロイは、砕け散り、無数の破片となって散らばっていった。

(こちら菅野直枝。ネウロイ撃墜確認。)

(こちら管制。リーダー反応消失。よくやった。帰還せよ。)

(よし、帰るか！芳佳。)

「うん！」

浅葱色の特急・b

1945年4月1日

欧州での戦も終わりが見えて来た頃のこと。

ネウロイは、突然太平洋の扶桑沖に現れた。

太平洋に現れたネウロイは、扶桑の南方領土を瞬く間に占領。硫黄島、沖縄では、後々まで語り継がれる事になる血で血を洗う激戦が始まり、全国各地の都市に、ネウロイの空襲が続いた。

その最中、宮藤芳佳は、衛生部の兵曹長として軍に戻る。

やがて、5月2日、欧州での戦が終わった。人類の勝利である。

一方扶桑では、沖縄、硫黄島が陥落寸前、という所まで追い詰められていた。

しかし、各国の支援が扶桑に向けた頃から、状況は一変する。

ついに追い詰められたネウロイは、最後の力で広島市、長崎市に飛来して自爆した。

それぞれ8月6日、8月9日のことである。

8月15日、第二次ネウロイ大戦は終わりを告げた。

それから宮藤は9ヶ月の臨床研修を経て医官となるべく、防疫給水所と併設の自衛隊病院に向かい、それから11ヶ月10日がすぎた。

中華共和国黒竜江省ハルビン市平房区
物語はここから始まる。

浅葱色の特急・b(後書き)

やったあ太平洋編遂にスタート!

浅葱色の特急・c

(芳佳ちゃん、ナオちゃん、きこえてる?)

宮藤達がストライカーユニットを片付けて防疫給水本部に戻ると、また、インカムに音声が入った。

「聞こえてます。」

「聞こえてるよ、何の用だ?源川。」

通信の相手は源川実一佐。元ウィッチで、宮藤達が所属する航空自衛隊第343航空隊の司令だ。

(うーん、ちよつと不明瞭力ナ?え〜つと〜ねえ、ちよつと〜うん、そう。〜でね〜え?そんなの後でいいじゃない〜そう、こっちは連合軍直々なよ〜うんうん、よろしい!〜はい、ありがとつネ〜よし、明瞭明瞭!)

「相変わらずムチャクチャだなあアンタ。」

菅野が言う。

(自分の事は最優先じゃないと気に食わないのよん)

「…で?何の用だ?」

(…あら、連れないわねえ…まあいいわ、早く回線返さないとおこられちゃうし。)

「…どの回線を使ったんですか?」

この人なら何だってやりかねない…そう思いながら、芳佳は恐る恐る聞いた。

(陛下。)

「アホか!」

(快くゆずってくれたわよん?)

「そういう問題じゃないと思いますけど…」

(うるさいなあ芳佳ちゃんは。私が良ければそれでいい!)

「世界で1番何様ですか…」

(お姫様!)

「あがりの年でその発言はもう苦しい物があるぞ…」

(…あら失礼しちゃうわ。エラ〜いオジサマ方にとってはまだまだ

【お姫様】よ)

「ジジイうけ良くてもなあ…」

(さつきから失礼ねえ…まあいいわ、そんな訳で本題よん 今回のオラーシャ戦争の自衛隊派遣について…まずは…ナオちゃん！あなたはシベリア側の第602統合戦闘混成団に参加しなさい。)

「…来たか！…つくう〜、腕がなるぜ！」

(次に…芳佳ちゃん、は…まずは扶桑皇国からの辞令ね。昇進よ。)

「え？昇進…？」

(そう、昇進よ、宮藤芳佳1尉？)

「…なんで…私が？」

(まあ待ちなさいってば。そうしなきゃならない理由があるのよ。

…扶桑皇国航空自衛隊宮藤芳佳1尉、貴官を第601統合戦闘混成団軍医長に任命する。連合軍第601統合戦闘混成団団長、エフゲニーヤ・カトウコフ准将。司令、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ大佐。)

「軍医長…」

(そう。あなたの医療技術、存分に役立たせなさい？そのために、軍医…今は医官っていうんだっけ？…になったんでしょう？芳佳ちゃん。頑張りなさい。)

「はい！頑張ります！」

(よろしい！…ついては…ナオちゃん、あなたは陸路でコミ共和国に行きなさい。8月15日に汽車でいろいろ来るから、切符とか書類とか…あと新型のストライカーユニットとかもね。それと一緒に行ってね。1人で勝手に飛び出しちゃだめよ。)

「わかった。」

(芳佳ちゃん、あなたは…汽車にのって大連まで行きなさい。切符の手配は済んでるから明日にでもね。)

「大連…ですか？」

(うん、南満鉄の京浜線で長春まで行つて、乗り換えて連京線に乗つてね…それで大連。まあ付き添いがあるから解ると思つわ。)

「行き方については了解ですけど…付き添い？」

(同じ第601統合戦闘混成団に所属する予定で、リベリオン空軍のメイリー・フェルナンデス少尉よ。)

「リベリアンなのか？」

直枝が言った。

(在扶米軍の魔女なんだけど何だか知らないけど芳佳ちゃんの出迎えを買つて出てくれたのよねえ…。しかもリベリオンが飛行機まで出してくれたし…断るわけにもねえ？まあ、あとの事はその人に聞いて。もう喋るのめんどいし。)

「はい！」

(よろしい！じゃあ二人とも、がんばんなさいネ)

ブツツつという音とともに通信が切れた。

「…ホント相変わらずだなあいつ。」

「でも…私達の事を良く考えてくれてるよね。」

「そうかあ？あいつの場合自分の手駒を大切にして置きたいって感じだけどな…まあいいや、頑張ろうな！芳佳。」

「うん！ナオちゃんこそ」

「あつたりまえだ！オレをだれだと思ってる？」

「私より昇進が遅れたイノシパイロット」

「あ、こら、てつめえ！」

暫くそんなふうじゃれあつて、一息ついてから菅野が言った。

「お前もずいぶん変わったよな…」

「私が？」

「ああ、ここにきたばかりの時はまともに喋れもしなかったじゃないかよ。…大体さつきみたいな軽口だって昔のお前じゃ…芳佳？」
菅野が振り返ると、芳佳ははたと立ち止まった。顔からは笑顔が消えている。

「あ…わりい！」

「うっん、別にいいの…」

「そ…そうか…」

「ただ…」

「ただ？」

「もう同じ誤ちは繰り返さない。そしてこんどこそ、戦いを終わらせてみせる。私の力で、皆を守ってみせる。」

菅野は一瞬きよんとして、それから少し苦笑して、言った。

「あつたりまえだろ、そんなの…私達は…ウィッチなんだからな！」

浅葱色の特急・c（後書き）

オリジナルウィッチのイメージモデル紹介

源川 実 みやがわ ちか

源田 実 げんだ みのる

その他解説

米軍

【アメリカ】が【亜米利加】なんだから【リベリオン】も【利米利音】とかそんなんだろうという勝手な予測より。

南満鉄

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E6%BA%80%E5%B7%9E%E9%89%84%E9%81%93>

Wikipedia、南満州鉄道株式会社のページ。路線も書いてあるのでぜひ参考に。

浅葱色の特急・d

次の日の、朝5時。駅へと続く中心街を、トミタの密閉式セダンが走っていた。

商店はまだ開いては居ないが、各種飲食店は仕込みを始めていたし、街は静かに活気付いている。

「で、そのリベリアンとの待ち合わせはどこなんだ？芳佳。」

「フェルナンデスさんね。えーっとね…駅の前で待っていてくれれば向こうから見つけるって。」

後席には、芳佳と直枝が座っていた。

「ふーん、芳佳ちゃんをさらって行く悪い魔法使いがそこで待ってるっ、てわけね。」

「悪い魔法使いって…」

話に割り込んできたのは、助手席に座っている西井四葉准陸将。魔法医であり、上がりになってからは外科医。扶桑皇国陸上自衛隊大陸方面隊貿易給水部の部長で、かつ哈爾濱自衛隊病院の院長である。

「そうね…海の向こうからやって来た…東の悪い魔女！」

「物語の冒頭で家に押し潰されるじゃねえかよ…それ。縁起でもない…」

「そうよ！いつそそうなっちゃえば良いのに！」

「待てそれで行くとお前マンチキンだぞ…」

「ナオちゃん、突っ込むとこそこじやないよ…」

「さっきから結構詳しいわねナオちゃん。私がマンチキンっていうのはなんか納得いかないけど…まあいいわ。まだまだ教えたいことたっ…くさんあったのに…ねえ芳佳ちゃん。今からでも陸自にこない？」

「い…いえ、それはちよつと…」

「あゝらら、ふられちゃったかあ…」

クスクスと笑いながら、四葉は言った。

「それにしても…皆ついてきたな…」

セダンの後ろには、トラックがついて来ている。哈爾濱防疫給水所の軍人や軍属達が揃って見送りに来ているのだ。

「皆『見送りたい』って」

「ほんと、さっきの話題じゃないけどさ、さながらマンチキンだな…」

「そりゃそうよ！宮藤ドロシーは皆のアイドルだもの…さて、そろそろ哈爾濱に着くわよ。」

セダンが駅に着き、芳佳たちが荷物を取り出したりしている。

「すいませーん」

車に寄りかかって煙草を一服していた西井に、リベリオンの新しく設立された空軍の軍服を着た娘が声をかけた。

肌は白く、碧眼。髪の毛は短めの真っ黒で多少荒れて、頭の上の方で一つ縛りにしている。

「何？あなた…」

至福の一時を邪魔されて、西井は不機嫌そうに答える。

「リベリオン空軍。メイリー・フェルナンデス少尉です。宮藤大尉の迎えに…」

「ああ、あなたが東の悪い魔女…」

「えっ!？」

「いえいえ、なんでもないわ。おーい、芳佳ちゃん。」

「はい？」

西井は車のトランクから荷物を取り出していた宮藤を呼び止めた。

「ほら、あの…東の悪い魔女。」

「わざとでしょう、それ…宮藤芳佳。扶桑皇国陸上自衛隊1尉です。」

よろしくね。」

芳佳は西井に突っ込んでから、メイリーの方に向き直って言った。

「メイリー・フェルナンデス。リベリオン空軍少尉。よろしくお願
いします。大尉。」

直立不動、拳手敬礼でメイリーは答えた。

声は、大きくも小さくもなく、それでいて結構よく響く。例えるな
らヴィオラの様な胸に心地よい声だ。

「説明とかは列車内でよろしいですか？」

「うん、構わないよ。」

「それでは…これが切符です。特急あじあ、三等個室。長春での1
時間の停車を含めて13時間30分の長旅です。」

「特急あじあで行けるんだ…」

「はい、扶桑皇国は鈍行を用意していたみたいですが。こちらの方
で切符を取らせて頂きました。」

「至れり尽くせりだなあ…」

直枝が咳く。

「なるべく早い方がいいですので。…荷物の準備はよろしいですか
？」

「いつでもOKよ？」

西井が答えた。

「それじゃあ…いきましようか、そろそろ。」

浅葱色の特急・d（後書き）

解説等

トヨタ

解説

イメージモデルは言わずと知れた自動車メーカー「トヨタ自動車」

メイリー・フェルナンデス

解説

イメージモデルは朝鮮戦争のアメリカ空軍エース、のマニョエル・
J・フェルナンデス。名前以外の情報は不明。

西井四葉

解説

イメージモデルは旧日陸軍の関東軍防疫給水部部长、防疫給水本部
（通称第731部隊）部隊長の石井四郎軍医中将。

東の悪い魔女、マンチキン、ドロシー etc etc …
解説

ライマン・フランク・ボーム著「オズの魔法使い」より頂きました。
物語のつながりとしては「マンチキンを支配していた東の悪い魔女
は竜巻でカンザスから飛ばされたドロシーの家に潰されてしまいま
した。」ってところ。主人公の女の子ドロシーが、オズの国入りす
る物語の冒頭場面ですね。

余談ですがミュージカル「WICKED」では東の悪い魔女には「
ネッサローズ」という名前が与えられていますが、原作にはこれは
無いらしいです。

特急あじあ

解説

戦前、満州を走っていた特急。

その機関車の車体は独特の水色で鮮やかに塗られ、機関車の形式からとってパシナブルーと呼ばれ親しまれたそうです。

厳密にはどうか明らかに浅葱色とは違う色ですが…まあ許してください。

浅葱色の特急・e

芳佳は、列車の窓から身を乗り出して、見送りを受けていた。

さすがに見送りが多すぎるということ、事前に最小人数だけがくじで選ばれていたらしく、ホームがはちきれんという事態はさげられたが、それでも通交の邪魔になるくらいの人数がいる。

「芳佳、またな。」

最前列にいた直枝がいう。

「うん、オラーシャでまた。」

「ああ、すぐだ。モスクワで待ち合わせだぞ、忘れんなよ。」

「うん！」

「さて、芳佳ちゃん。あなたに渡そうと思ってる物があるのだけど。」

西井は、後ろの兵から桐の箱と美しく腕曲し、濃い色のニスで塗られた木製の物体を受け取ると、芳佳に差し出した。

「開けて。」

西井に言われて、芳佳は箱を開けた。

「うわあ……」

思わず感嘆の声を漏らす。

中に入っていたのは、一丁の拳銃である。

銃身は細長く、銃把は箒の柄の様。弾倉はトリガーの前にあり、その機構はまるでポルトアクシオンライフルの様だ。

全体的に使い込まれてはいるもの、鉄の部位は鈍く黒光して独特の凄味を醸し出し、木製の銃把はニスが木に良く馴染み、良い味を出していた。

「モーゼルM712『シユネルフォイアー』。私が前線に出ている時に使っていたものよ。ちょっと古いけどメンテナンスはこまめにしてたし、昨日オーバーホールしたから作動に問題は無いわ。」

鉄のあちこちについた傷が、この銃が長らく西井と共にあったこと

を物語っていた。

「ありがとうございます！」

「良いのよ、私にはもう必要ないし…それに、あなたロクなものでもないしね。」

「うっ…あはは…はい。」

芳佳が持っているのは、安いという理由で買ったオラーシャのトカレフTT-33の中華製コピー。

いつ壊れるとも解らず、セーフティすらない代物だ。

「あ、弾は共有出来るからね。今までのをそのまま使えば良いわ。」

「はい！ありがとうございます！」

丁度その時、鋭く警笛がなり、列車がガタン、と動き出した。

「じゃあ芳佳ちゃん、元気でね。」

二人は固く握手した。

やがて、列車はだんだんとスピードを上げて、見送りとの距離も開く。

「芳佳ちゃん！絶対帰ってくるのよ！良いわね！」

「はい！…皆さーん！行って、きまーす！」

芳佳は、距離が開くにつれて、それに比例して声の大きさを上げた。遙か後方で歓声があがったが、もうなんと言っているのかは聞こえない。

やがて、ホームも小さくなると、芳佳は窓を閉めて座席に深く座った。ふとみると、目の前のテーブルには、先程のモーゼルが置いてある。芳佳は、それを肩から吊って、上着の下に入れた。

その感触をよく確かめて、支えてくれる人達の思いを噛み締めてから…それから…

あ、メイリーちゃん寝ちゃったんだ。

少し考えて、することもないので、芳佳はうたたねを決め込むことにした。

朝が早かったせいか、芳佳が夢の世界に落ちるまで、そう時間はかからなかった。

浅葱色の特急・f

轟音

地響き

吹き付ける風

これは…爆風？

あたり一面は火の海で

立ち昇る火柱で前が見えない

撃たれ、弾き飛ばされて、転がり、

気付けば箒も杖も無く

刀一本のみを握りしめて…

握りしめて…

…

「宮藤大尉、起きてください宮藤大尉。」

「…う…ん…どうしたの？」

もう長春に着いたかとも思ったが、列車は全速力で走っているのがわかったし、そもそもそんなに寝ていた自覚が無かった。

「3時方向からネウロイ。敵です。」

眠い目をこすりながら聞いた言葉に、思わず眉間に皺を寄せてしまった。こんなところにネウロイ？

「どういうこと？」

「巢に属さない野良ネウロイかと。進路から見ても、明らかにこの列車を狙っています。接敵までおよそ10分。応援到着は少なくとも20分後。一応、車掌には伝えました。これより列車は全速力で逃げて尚且つ応援を呼ぶそうです。どうします？大尉。」

現在の状況を実に的確に、メイリーは報告した。一切の無駄が無い。

メイリーちゃん、探知系の能力なのかな…芳佳は思った。魔導針は出ていなかったけれど。

「…うーん。といつてもストライカーユニットが無いんじゃない…」

「ええ、屋根に登って応戦しても、これじゃあ…」

こんなに細長い護衛対象をたつた2人で10分も保たせるなど、どだい無理な話である。

宮藤が考えていると

（宮藤大尉聞こえるか。こちらは中華共和国空軍、長春大房身基地司令部だ。）

「こちら扶桑皇国航空自衛隊、宮藤一等空尉。」

突然インカムに声が入った。今はどんな情報でも欲しい。情報を貪るかの様に、反射的に応答する。

（只今貴君の乗車する特急の救援に向かっている。しかしはつきり言つてそれでは間に合わん。）

「はい、それで今どうしようかと…」

（そこで朗報だ。今その列車にはストライカーユニットが積んである。）

宮藤とメイリーは目を丸くした。

「本当ですか！…ああ、メイリーちゃん、武器の準備。」

「Roger！」

「…で、すみません、なんでしたっけ？」

（あ、ああ、ここから先はさして重要な話じゃ無いんだが…あなたの国が試験的に購入したオラーシャ、ヤナーチエク設計局のYak-15だ。あなたが使うなら問題あるまい。）

「了解。ありがとう！」

（どういたしまして。…レーダーによるとネウロイの機数は中型が3機だそうだ。部の悪い戦いではあるが。10分間耐えてくれ。）

「なるべく速くおねがいね！」

（承知！）

ブツツという音とともに通信が切れた。

「さて、メイリーちゃん、準備は？」

「万端です。」

宮藤は、モーゼルを肩に下げ、刀とM2カービンをつかんだ。

「行くよ！」

「了解！」

浅葱色の特急・f（後書き）

中華共和国長春大房身基地

解説 現、長春龍嘉国際空港のこと。今は民間用空港ですが、スタートは軍用だったようです。

浅葱色の特急・g

車掌さん（別にガス体の塊ではないのであしからず。）と、オラーシャ側、扶桑側それぞれの責任者の協力で貨物室に入り、芳佳達はストライカーユニットと対面した。

形は…およそ格好良いとは言い難く、長さの違う二本の管を束ねて長い方を折り曲げ外壁を覆った様というなんともお粗末な物で、何故二つも管があるのかと言うと何の事はない長い方がエンジン部という代物である。

「さて、問題は一つしか無いということです。」

そう、試験導入の機体だからか、この機体は一機しかない。

「私が履くね。」

迷い無く宮藤が言った。

「はい、そのほうが良いでしょう。私の武器はこういう戦闘には向きませんし…」

メイリーの武器は散弾銃のレミントンM31。この銃は最長サイズの32インチでも総弾数は4発で、群れている小型ネウロイの掃討や大型ネウロイの表面破壊には向いているが、中型三機など不得意中の不得意である。

「屋根から牽制でもしてます。」

「うん。」

芳佳は靴を脱いで昇降カタパルトのラツタルを駆け上がるとその勢いで跳び、脚をYak-15におさめた。

青白い光とともに、可愛らしい耳と尻尾が現れる。

「それでは行きますよ。」

メイリーはラツタルに乗ったまま、上矢印の書かれたボタンを押す。ゆっくりりと、カタパルトが上昇を始めた。

屋根の上上がった瞬間強い風に晒されて、芳佳は一瞬たじろいだ。この特急「アジア号」を引っ張るパシナ型機関車の最高時速は約120km。

それを緊急事態で走らせているのである。何かを伝えようと話そうとしても聞こえない。

「……………」

「え…！？なあに!？」

メイリーはインカムを耳に当てた。

(伝える事が2つあります。)

「伝える事？」

(一つ目、コールサインです。私達は601の第二飛行隊所属なので…私はブルーム4、大尉はブルーム2。これからもよろしくおねがいします。)

「ブルーム2了解。もう一つは？」

(そのヤクの翼下には左右あわせて二つのミサイルが釣ってありますよね?)

芳佳が頷く。

(こいつはウォーロック計画のCCS…コアコントロールシステムの技術の一部を使っていて、自動的にネウロイのコアを探知、攻撃します。)

「うーん…なんかフクザツ…」

一度は自身を破滅への道に追い込んだ技術である。嫌悪感がないといえは嘘だ。

(あはは、まあそこは置いてですね…)

そういいながら、メイリーは横に置いてあった腕輪を芳佳にはめた。ボタンが幾つかついていて無骨な腕輪だ。

これは？芳佳がたずねる。

（火器管制の腕輪ですよ。）

火器管制？

（使い方は道中で説明しますよ。もう時間がない…ブルーム2、離陸を許可します。貴官の幸運をお祈りいたします。）

頷くと、芳佳はまず垂直に飛び立った。そしてすぐに下降すると、今度は地を這う様にして進む。

ネウロイとの衝突…予測攻撃半径内まで、あと5分。

浅葱色の特急・h

「こちらブルーム2、敵機を肉眼で確認。」

肉眼といってもまだ点ほどの大きさだから、気付かれた様子はない。

(ブルーム4了解。これより火器管制ユニットとの説明をします。)
そこまで言われて、芳佳は気になっていた事を口にした。文字がよめないのである。

「…これキルリ文字だけど…大丈夫かな…」

(大丈夫だ、問題ない。)

「発言が問題だらけだよ…」

因みに任天堂はまだ花札屋、ソニーコンピューターエンターテイメントに至っては親会社のSONYがやっとな東京通信工業として創業した。という時代である。

(冗談はさおいて…今は緑のボタンがでてますよね？その隣の赤いボタンを押してください。)

芳佳が言われた通りにボタンを押すと、まるで魔法発動の時のように腕輪が青白く光った。

続いて魔方阵が現れてすぐ崩れ、ボタン以外何も無かった腕輪にディスプレイが表示される。

《 》
キルリ文字での表示のあと、
《 ？ 》

(言語って表示されました?)

「わ…わかんないけど…4文字でアールを反対にしたやつにから始まって最後がkっぽいやつのも事いいの?」

(はい、それです…したら画面をスライドするようになぞって…扶桑語を探してください。)

画面をスライドするようになぞるって…おお!

芳佳は思わず感嘆した。するするすると画面がスクロールする。

下のほうまでスクロールし、扶桑語を選択した。

(扶桑語の漢字仮名交じりになりました?)

「うん…すごいね、これ。」

(本当に凄いのはここからなんですよ…)

メイリーがそう言うがはいか、画面が再構築された。

メイリーの位置を中心に、芳佳とネウロイの位置関係が現れる。

(リーダーや探知系能力のあるウィッチの観測結果を表示させる事が出来るんですよ。そして…ほら、下の発射ってかいてあるのを押せばミサイルを撃てます。自動誘導とはいえ限度はありますから、なるべくまつすぐに捉え続ける事を心がけて下さい。)

「了解。」

とはいってもねえ…訓練もしてない武器が初見で当たるのかな…

「ブルーム2よりブルーム4。ネウロイ達の後ろに回り込んだ!」

(了解!ブルーム2、交戦を許可します。)

芳佳はすぐに上昇体制に入ると、ネウロイと同高度で反転し、ネウロイを捉えた。

しかし…ネウロイはビームを撃ってこない。

気づいてない…?

まあ、動きもしないなら都合かな。

芳佳はそう思い、ネウロイに方向に向かって飛ぶ。

しかし、依然としてネウロイはビームを撃ってこない。

ええい、ままよ!

正面にネウロイを捉え続けて、芳佳は発射ボタンを押す。

直進を続けていたネウロイが回避運動をとる。

あ…やつちゃったかな…これは…

そう思うのも束の間、二本のミサイルはその回避運動をそのまま追う様な形でネウロイに吸い込まれる様に命中した。

(ブルーム2、2機撃墜！)

(ちよっと、僕の獲物がなくなっちゃうじゃないか！)

メイリーと…なまりの強い英語の音がそれぞれ歓声をあげる。

「私はミサイル発射ボタンを押したただけなんだけどね…」

謙遜ではなく、本当にミサイルがネウロイに吸い込まれて行く様だった。

(ははは！それじゃもしかしたら僕達がただのミサイル運搬機になる日がきちゃうかもね。)

冗談と受け取ったのか、訛りの強い英語の音がそんな事を口にした。

(ありえない話ではありませんよ…あ、えーと…)

(交戦中はサークル8、と呼んでね。君達と同じでライトニングウィッチーズの第一飛行隊8番機だよ。よろしくね？)

「よろしく。」

(よろしくお願ひします！…さて、あと一機です。一気に倒しちゃいましょう。)

「うん…うん？」

芳佳は、一瞬、自分の目の錯覚と思った。砕けたネウロイの破片が浮かんでいる様に見えたのである。

次の瞬間、それは確信に変わった。残った一機に破片が集まって行く。

「ブルーム4、ミサイルはさっきの二発だけ？」

(ええ…そうですけど…)

集まった破片は残機ネウロイに集まったかと思うと、そのまま表面に付着するのではなく、残機ネウロイに取り込まれた。

…

ええと…

マズイ…これはかなりマズイ…

浅葱色の特急・i

芳佳は一旦高度を取ると、M2カービンのセーフティを外しセレクターをフルオートに変え、一呼吸置いてから斜め下方向に一気に飛び出した。

そのまま降下し、引き金を目一杯引いて、弾倉のありったけをネウロイに叩き込んだ後、ネウロイをかすめる様に再度急上昇する。無駄な動きは一つも無いほぼ完璧な零距离攻撃だ、しかし…

「傷一つ無いとはね…恐れ入るよ。」
体積が変わらずに質量が変化すると、物体の密度は上がる。仮に二機分の質量を取り込み、かつ体積は変わらないとすると…単純計算で密度は3倍だ。

ただでさえ弱装に小口径のM2カービンでは、傷すらつける事すら出来ない…ってことね。

さて…どうしたもんか…

…

すらり…と、芳佳は九字兼定を抜くと、そのまま八相に構え、眼を閉じ、鋒に魔力を集中させた。

扶桑の魔法使いの必殺剣は、大きく分けて二つある。

一つは、斬撃を遠くまで飛ばす「風」シリーズ。

そしてもう一つが、魔力を一点に集中し一瞬の内に相手を叩き斬る「雷」シリーズだ。

「風」シリーズの本質は魔力の大放出であり、従ってこちらの習得はさほど難しくは無い。ただ、その性質上作戦行動時間が極端に短くなるため、習得しても使う者はほぼ皆無だ。

対して「雷」シリーズは、それとは違う意味で使用者が少ない。この技は本当に微妙な魔力操作が必要になり、そのため習得できる者の数が非常に限られてくるのだ。

今現在、この技を使えるのは扶桑でも3人のみ。

一人は、歴代扶桑魔女の中でも屈指と謳われた近距離戦闘の雄、「魔のクロエ」こと黒江綾香1尉。

もう一人は、ご存知菅野直枝2尉。彼女は持つて生まれた才能によりこの技を扱う事が出来る、非常に稀な存在だ。

そして、もう一人は、治癒魔法という念動力系固有魔法のなかでも特に繊細な力を有す、先日1尉になったばかりの第601統合戦闘混成団軍医長、宮藤芳佳。

芳佳は目を開いてネウロイを見据えると、そのままさつきと同じ軌道でネウロイに向かって突っ込む。

ここだ…！

あと少しというところで右にロール、そして脚を前に出し、そのまま剣術のけの字も無く、丁度バッターがバットを振り抜く様な形でネウロイの背中を叩き斬る！

ゴバツ…！ガゴガゴガギギ…！

しかし、魔力を一点に溜め込んだ必殺剣をもつてしても、刀はネウロイの背中の中程で止まる。

だが、芳佳は止まらない。そのまま歯を食いしばると、無理やりジェットエンジンを噴かしたのだ。

ギギツ…ガガツ…ガキン…！

ジェットの力で無理矢理押し進むと、今までよりも硬質、しかし澄んだ音が響いた。

ネウロイが悲鳴をあげる。

コアだ…！

芳佳は深く息を吸い、裂帛とともにさらに鋒に魔力を込める。

「うおおああああああっ…！！！！」

ピシッ…ミシミシッ…ピキキッ…

…

戦闘開始から丁度10分。ネウロイが断末魔をあげて弾け飛んだのと、Yak-15のエンジンが弾け飛んだのは、ほぼ同時のことだった。

浅葱色の特急・i（後書き）

解説

・必殺剣

公式の作中、実際に出てきた技に作者自信の解釈を加えたもの。「風」シリーズはつまり烈風斬、「雷」シリーズはつまり雲耀のことである。

あまりにもチートいので烈風斬は公式作中よりも色んな制約を着けました。

浅葱色の特急・j

(ブルーム2クラッシュ！宮藤大尉！)

「交戦中はコールサインでしょ、メイリーちゃん…」

慣れないジェットストライカーで飛んで、必殺剣を二回も使用したのち、ネウロイの破片があちこちに刺さっている、という満身創痍の宮藤が言った。

(良かった…無事だったんですね。)

「無事とはあんまり言えないね…ふう、なんとか間に合って良かったよ。」

サークル8が言う。

(あ、えーっと…)

「詳しい自己紹介は後でね。ともかく今は着陸するよ。」

(あ、はい。)

ここは特急のバスルーム。トイレや洗面台のある床は血まみれで、形や大小の様々なネウロイの破片が転がっており、血染めのブラジヤーとズボンが脱ぎ捨てられている。そしてカーテンで仕切られた湯船には、一糸纏わぬ姿の宮藤が居た。

麻酔は他の急患のために最後までとっておかねばならない。それにネウロイの破片は全身のあちこちに突き刺さって居たため、そのまま処置することにした。手すりに手ぬぐいを縛ってそれを噛み、大人でも発狂しそうな痛みを堪えながら処置をしている。

「うっ…うっう…！…うあっ！…ぐっ…うう…！」

ずるり、と、宮藤は苦しそうに肩で息をしながら、右太腿に刺さっ

た一番大きな破片を慎重に取り除いた。

本当は誰かに手伝ってもらえれば良かったのだが、生憎そういう心得のある人は居なかつたし、それにこれ位の処置自分で出来なきゃどうしようもない。なんとか抜き終わり、疲れきった様に壁にもたれかかると、抜き取ったネウロイの破片を一瞥してから、床に放り投げた。

「はあ……………はあ……………ふう……………」

痛みが落ち着いてから、鉗子を外し、魔法で傷を塞ぐ。傷はみるみる内に小さくなり、やがては傷跡を残して完全にふさがった。

痛みはじんと響くが、これはもう仕方がない。

二年前より少し伸びた髪を手で梳いてから、シャワーを浴びようと立ち上がろうとして脚に力を入れたその時、激痛が宮藤を襲った。バランスを崩して血糊で滑り、輸血瓶と多くの手術道具を巻き込んで湯船に倒れこむ。

割れた輸血瓶が流れ出し床に血糊が広がる。冷たく鋭利な手術道具や輸血瓶の破片がやっと塞いだ皮膚を裂き、悲鳴をあげそうになつたが、声すら出ない。

バスルームの白い天井が宮藤の視界を覆った。

「遅いなあ、宮藤大尉……………」

「まああれだけの怪我じゃね……………」

「しかも麻酔使わないって……………ああ、考えただけで痛い……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…あー、タバコ吸ってもいいかな。」

「あ、はい、どうぞ。」

「はーやれやれ、そう言いながらサークル8…中華共和国空軍中尉、柳中尉は、雑膿から使い込まれたシガーケースとフリントロックの古風なライターを取り出す。」

シガーケースを突き出して勧めてくるのを断って、私は車窓の方を向いた。

着陸してからは手ぬぐいと医者鞆と…あと一応血液型的には問題なかったから私と柳さんの血を抜いて入れた輸血瓶を持って、宮藤大尉はバスルームに引きこもってしまった。

本当は扉で待っているべきなのだとは思いが…うめき声が聞こえるところにもこうにも辛くて、気分を悪くしてしまった私は柳中尉に担がれてここにいるってわけだ。

それはいいのだ（よくないけど）…が、

気まずい、会話が続かない…私初めてあった人に話すのって苦手なんだよね…無理に話そうとすると機械的になっちゃうし…さっきハルビン出発する時も話しかけられる前に寝ちゃったし。

「あー…」

どうにもこうにもいなくなってしまう感じがヤケだと声をかけてみた。

「うん？」

「そのタバコって…」

もうちよつとなんか違うのなの私。

「ああ、これね、僕が自分で巻いたんだよ。」

「そんなの出来るんですか？」

「うん、専用の紙の上に草をひとつかみ置いてね、この巻き機でこつくるくるつと巻くんだけ。」

「何でそんな…？」

「あはは、確かに市販品買った方が面倒臭くはないね。大連、長春、ハルビンって並ぶ満州地方の大動脈だから旨いリベリオン産とか普

通に入ってくるし。」

「だったらなぜ」

「ちよつとした手慰みだよ。ちよこちよこつと弄れるものがあるといろいろと気が紛れるんだ。それに…」

「それに…?」

「すこし…思い入れがあつてね。」

「思い入れ…」

…てなんですか?と聞こうと思ったちよつどその時、ガツシャーン!と、金属とガラスの割れる音が鳴り響き、出かかった私の言葉を飲み込ませた。

「何の音…?」

柳中尉が灰皿でタバコの火を消しながらつぶやく。

「バスルームからです!ちよつと見に行きましよう!」

「あ…あ…」

「宮藤大尉…宮藤大尉!」

バスルームのドアをゴンゴンと叩きながら、宮藤大尉に呼びかける。どうしよう…返事がない…ただのしかばねのようだ(?)

「ちよつとどいて」

柳中尉…と呼びかけるより早く、中尉が手をかざすと鍵が自然に開いた。

「宮藤大…ひつ!」

最初に目に付いたのは赤く血塗られた床。そして散らばったネウロイヤガラスの破片に冷たい手術道具。脱ぎ捨てられた下着と服装。そしてその先に…仰向けに倒れ、手術道具を握りしめた一糸纏わぬ姿の大尉。

「み…宮藤大尉!」

滑りながら駆け寄って大尉を仰向けにする。息はあるけどすごい苦

しそっ…

「自分で処置できない状況なのね…」

柳さんが言った。

「どうしましょう…」

「傷口の上に大尉の手を当ててあげて。」

「どうですか…?」

私は、言われた通りに左の太ももがざっくりきれている一番大きな傷跡に大尉自身の手を乗せて、縋る様に柳中尉を仰ぎ見た。私の顔を一瞥してから、中尉は地面に広がった血で陣を描くと、そこに片方の手を当て、もう片方の手を宮藤大尉に当てる。

すると、突然空間が緑色に光りはじめ、同時に強制的に大尉の使い魔の耳と尻尾が出て、宮藤大尉を下から青く照らした。

「うっ…くっ…」

傷口はみるみる塞がり、宮藤大尉も穏やかな顔に戻った。

ガタン！

やがて緑色の魔法が終息すると、一部始終を恐らくアホ面でみていたであろう私は、そんな誰かが倒れる音でやっと顔をあげた。

「たはは…いやー…腰が抜けちゃった…」

どうやら自分自身も驚きだったらしい。

柳中尉は力なく尻餅をついていた。

浅葱色の特急・k

頭痛と吐き気のダブルパンチという、これまでの生涯で最悪の目覚め方で芳佳は目を醒ました。

揺れている床と…毛布？

（あ…れ？私…そうか、いたみで転んで…）

自分の身体を確認する、傷は…ほとんどない。

（記憶があいまい…うーん…）

毛布をのけて身体を起こす。身体を見ると、着た覚えのない紺色の制服を着ているのがわかった。

「あ、目が覚めましたか？」

「あー…うん、ちよつと気持ち悪いけど…」

無理しないでくださいね、というと、メイリーはスタスタと部屋から出て行き、“自分をすんでのところでキャッチしてくれた誰か”を連れてもどってきた。

「…まだ生きてる？」

「…一応ね。」

よかった、そういいながら柳はソファアに座った。

「僕もあんなのはじめてだからねー、失敗してるんじゃないかってビクビクしたよ」

口ではそんな事をいいながら、そんな風には全く感じさせずに柳はタバコを取り出して火をつける。

「…一本貰える？」

「どうぞ」

一本抜き取って、火を貰ってゆっくりと吸い、宮藤は顔をしかめた。

「重たい…あと凄い匂い…」

「香料入りだからね、僕は好きだけど。」

人から手巻きもらわない方がいいね、そういいながら芳佳は灰皿にそつとタバコを置いた。

「吸っていいんですか？」

「どうせ魔女は健康被害ないし。」

「そうそう、むしろ頭が冴えるんだよ。」

「501には吸ってる人居なかつたけどね…507前身の義勇中隊にはビューリングさんって人が居たんだよ。」

「まあ痛手としてはお金がかかる事だけど…僕たちの給料ならそこまで気に病むことでもないだろ？」

「そういうと柳はふーっ、っとな煙を吐いた。

「そういえば自己紹介まだだったっけ」

「うん、苗字とコールサインしかわかんない。」

えーっとな…そういうと一応、柳は灰皿にタバコをそつと置いて芳佳に向き直った。

「僕は柳哲春。漢字で「柳」、哲学の「哲」、春夏秋冬の「春」って書くよ。歳は17、中尉。…あ、そうそう、601にいる時は「やなぎはじめ」って扶桑名で名乗るからよろしく」

「扶桑皇国航空自衛隊医官の一等空尉、宮藤芳佳。同い年だね。」

「そだね、僕も元々は扶桑海軍にいたし、敬称はいいかな？」

「うん、…じゃあ…はじめちゃんでもいいの？」

「…いやー…敬称はいいっていつたけど、なんかくすぐつたいね。」

「あはは、そのうちなれるよ。」

「じゃあ僕は芳佳って呼ぶことにするよ。よろしく、芳佳。」

「うん！」

「ところで…私はどうやって助かったの？」

倒れたところから記憶があいまいなままで、医療魔法魔女もいない中、いったいどうして無事でいられたのか、宮藤はずっと気になっ

ていた。

「そうそう、それ私も気になってました。」

「…え、君見てたよね？すっかり見てたよね？」

「いや…なにをしたのかはさっぱり…」

「…そうだね、無理もないね…」

はじめはタバコを灰皿に置いて、髪をわしゃわしゃとかき混ぜた。

「魔力を扱う…っていうのはなにも魔女だけが出来るわけじゃない、これは知ってるよね？有名な人でいえば…ほら、アフリカの星の付き人。」

「マチルダさん？」

「そう、あの人の魔力は魔法とは根本的に違う何かなんだよ。…っていうかここまでいえば芳佳はだいたいわかつたんじゃないかい？」

「うん、だいたいね…風水術？」

「ビンゴ。」

「ちょ…ちよつとまってください！一体何を？」

目が点になっていたメイリーは、はっと気付いて質問する。

「つまり…魔法とは違う魔力を流し込んで、私の魔法を強制的に発動させた…ってことだよな？」

「うん、今回使った…っていうか僕はそれと魔法しか使えないけど…まあいいや、ともかく風水術で魔力を使ったのさ。魔法は個人差でうけつけないことがあるけど、風水の魔力は脈と穴…つまり長〜いうねうねとそれのくぎりを見つけて自然に満ちたエーテルから魔力を引つ張りあげるものだからね、それは凄く純粋な魔法力で、どんな人でも大丈夫ってわけ。」

「で、それを私にながして強制的に使い魔を呼び出して魔力操作もそのまま私が普段使ってる魔力に早変わり、あとは幹部に手を当てれば自動的に傷はふさがる…こんな感じかな？」

「まあそういうこと…わかった？メイリー。」

「なんとなく…ですけど。」

「上々だね。…さて…そろそろ…な筈なんだけどなあ…」

はじめがそう言った途端、100km/hで進んでいた列車が徐々に減速を始めた。

ここは長春、またの名を「北国春城」。中華共和国満州地方の要にして、共和国最大の学問の町。

浅葱色の特急・k（後書き）

はい汽車内の話はこれで終了。いかがでしたでしょうか。
次回はぶらり途中下車の旅ですよ。

「…」
「…」
「…」
「…どうですか？」
「…動かない…ね。」
「…やっぱりあのやり方じゃまずかったかなあ…」
折角時間もあるし、町に出てお昼でも食べて、フラフラと歩こうと
いう事になったのだが…
「…痛む…とかそういうことじゃ無いんですよ？」
「うん。感覚が無い」
「でも異常もこれと違ってないんだよねえ…」
「うん…診た感じ全部ちゃんと繋がってるし問題はないと思うんだ
けど…」
「…けっこつまりいんじゃないですか？それ…」
「…いや、多分大丈夫だと思うよ。それよりもほら、私はもう少し
調べてるからさ、二人でいってきなよ」
「えー…」
大尉一人だけを置いて…ですか…
「ああ、うん、いつてくる。」
そう言おうとした瞬間、はじめがそれを遮った。
「えっ！…」
「ほら行くよ。」
「えっ…ちよっと…！」
はじめはぐいぐいとメイリーを引っ張り、コンパートメントから出
て行った。

…全く、察しが良くて助かるよ…
芳佳は駅から離れる二人を目で追いながらつぶやいた。
はは…ははは…
全くいつもいつも…どうしてこう…
新品の制服にシワが広がり、動かない脚に、水滴が幾粒か、ぼたりぼたりと落ちた。二人がいなくなった三等室には、押し殺した様な嗚咽が、虚しく響いていた。

昼時ともあって、町は活気づき、飲食店からの空腹の胃をくすぐる匂いで、通りは満たされている。
教育機関の多いこの町では、学生のために値段設定の良心的な店も多い。
かくいうはじめもいきつけの店があったので、二人はそこに向かってふらふらと歩いているのである。

「はあ〜ついたついた!」
「お腹ペコペコです……どうしたんですか?早く中入りしましょうよ」
戸口の前で看板を見上げたまま立ち止まったはじめに、メイリーが催促する。

「…いや、これで暫く見納めかなーと思ったら、なんとなく…」

「あつ…すいません…」

「ん？ああ！いや、いいのいいの、うん。早く入ろう！」
ガラガラつと、はじめは勢いよく扉を開けた。

「いらつしゃいませー！」 威勢のいい店主

「あらゝはじめちゃんじゃない！」 愛想のいいおかみさん

「はじめ！無事だったk…」 誰か
ピシャツ！

「…」

「…」

「…えつ？」

「okok気のせいだ、きっと疲れてるんだはははは…すう…
ふうー…よしっ！」

ガラガラつ！

「はじめ！無事だつt…」

ピシャツ！

ガツ！

「そんなに俺にあいたくねえかよおおおお！？」

「うれしいけど…うれしいけど昨日涙ながらお別れしたばかりで
しよおおおおお！？」

「おーい俺の店の扉壊す気か！」

あつ…すいません。と、二人が同時に謝る。

「ごめんねメイリーちゃん、見苦しいとこ見せて」

「いや…それはいいですけど…こちらの男性は？」

「ああ、俺？俺は中華共和国少佐、劉粹剛。」

「ほら、列車内の君たちに連絡した大房身基地の…」

「…えーつと失礼しました。メイリー・フェルナンデス、リベリオ
ン空軍少尉であります！」

メイリーが踵を揃えて敬礼すると、邪険にすることなくきちんと答
礼してくれた。

「立ち話もなんだし…入らないかい？」

「はいっ！お腹ペコペコですっ！」

「おっ、元気がいいね…よーしおっちゃん、特盛で頼むぜ！」

あいよっ！っと店の奥の方から威勢のいい声が聞こえた。

「で…なんでここに？」

「いや…なんとというか…はは…いやー無線で聞こえてくるたびどうしても会いたくなって…」

「…もう、ばかだな、君は。…ほんと、ばかだ。」

口ではそういつつも、顔を真っ赤にしながらうつむきつつ嬉しそうに笑うはじめ。

……………おい

おい、なんだ。

なんだこれは、おい。

甘々な雰囲気呑まれ、すっかりいたたまれないメイリーである。

…つていうか爆発しろ。盛大に爆ぜてしまえ。

「あー…ゴホン。これでおわかれだからって盛り上がるのはいいがほら、そのの…メイリーさんがおいてけぼりだぞ。」

店主の助け船である。他人がこれ程ありがたいと思っただこともない。

「お別れ？とんでもない。」

劉さんは、そこで一枚の紙を取り出した。

「ふっふっふ、この辞令をむしり取ってきてやったぜ。」

そこには、はじめの直接の上司としてはじめに同行すること、現地についたのちは601統合戦闘混成団の指示に従う、という旨の事が書かれていた。

「本当!？」

ガタツと椅子から立ち上がり、劉にとびつくはじめ。

「嬉しい…うれしいよ…」

ぎゅう…

…

…

…

だめだこりゃ。
暫くお待ちください。

《負傷と…それから右脚不随…》

芳佳は、源川一佐に連絡をとっていた。

《ま、それはいいとしてー》

「えっ？」

《うん、べつにいんだよあ？芳佳ちゃんは何としてよばれたんでしよーか？》

「えつと…軍医長…ですけど…」

《そう。どうせ兵站なんだ。銃後なんだ。飛べ用が飛べまいが関係ない。》

「でも…」

《デモもストも無いよ。…確かに飛んでいって必要時に軍医ついで意図があつたのかもしれない。でもそんなことは一切どこにも書いてないんだ。》

「…」

《だから安心して自分の務めを果たしてくるといい。連合軍にはこっちから連絡しとくよ。…もしゴネたら奥の手があるしね。》

「…奥の手？」

《私は航空総隊の司令でもあるんだよ？もし何かあったらこう脅すさ。今回扶桑からは機械化航空普通科員、戦闘機部隊、高射部隊、その他一切の防空戦力を支援しないってね。》

「…MJD？」

《MJMJ。本当にやるよー。もしもそれで政府がゴネたら私の戦力でこの国のつとってやる。なんせこっちは英雄＋ヒロインなんだ

から。泣いておけば国民の皆様が鉄槌を下してくれるでしょう？」

「…ありそうで困りますね。」

《自分で言ってるんだけどこれで動くこの国は凄いわぁ…》

「ふふっ」

《あ、やっとな笑ったー。そうそう。芳佳ちゃんは笑ってたほうが可愛いわよー？まあそういうわけだから。せいじゃね。》

「はい」

…

《あ、言い忘れてた。芳佳ちゃんの刀さー。直刃だったわよね？》

「はい、そうですけど…」

《じゃあ輸送機を一機用意しておくから大連に着いたら刀だけ先に送ってくれない？いい事思いついた。》

「ええ…いいですけど…なにするんですか？」

《ひみつー。じゃあこんどこそじゃあね。》

…

滅茶苦茶な会話だったが。芳佳はとりあえず一時、心に安寧を取り戻した。

これから劉と合流したメイリー達と合流し、阿呆らしいぐらい騒がしくなるのだが…それはまた別のお話。

北国春城・b(後書き)

キンクリでちょっと飛びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6854p/>

Lightning Witches ~ THE ORUSSIAN WAR ~

2011年12月29日15時46分発行